

浄土

monthly
JŌDO

September 2009

9



法然上人鑑仰会



出家は、若きと老いたると、
いづれが功德にて候。
答。老いては功德ばかり得候。
若きは、なおめでたく候。



(百四十五箇条問答)

呉丘 富塚善吉・友禅模様師『浄土』2009年表紙の人

明治33年神田区松下町に生まれる。

日本画の小林呉橋に師事。

淀橋区落合に工房を構え多数の弟子を持つ。

戦時中、千葉興津に疎開、戦後も潮風の漂う仕事場で友禅を描き続ける。

昭和52年逝去。

表紙は構図から下絵、糸目糊置、色挿し、仕上げ、金加工まで全工程を一人で行った逸品。

9月号『阿国歌舞伎』

浄土

2009/9月号 目次

浄土誌上ライブラリ「阿弥陀さま」(三)	佐藤春夫	2
真野先生バリ講演会		7
連載小説 快僧渡辺海旭	前田和男	8
会いたい人 佐野成宏さん②	関 容子	16
響流十方	袖山榮輝	24
朝食のすすめ	麻生タオ	28
江戸を歩く 第二十九回	森 清鑑	30
変な駅気になる駅	長谷川裕 村上健	36
Jフォーラム		43
浄土誌上句会	選者=増田河郎子	44
マンガ さっちゃんはネッ	かまちよしろう	47
編集後記		48
教えと法話	生野善應	



表紙題字=中村康隆前浄土門主
 アートディレクション=近藤十四郎
 協力=迦陵頻伽舎

佐藤春夫

|| 子供にわかるお話 ||

阿弥陀さま (三)



法蔵菩薩はいよいよ仏さまになって御自分の国をひらこうというのです。どんな仏になって、どんな国をひらきたいのでしょうか。

仏さまになったら、その体の光がどこまでもかがやいて、いついまでもその作用が衰えないようになりたいというのはつまり太陽になりたいというような並々ならぬ大きなぞみです。このぞみがかなえば阿弥陀さまになるのです。

そうしてこの仏さまのひろく国はほかに二百十億あるというすべての仏の国々のうちでも第一にいいものになりたい。いい国というのはその国の人々がみな立派なすぐれた者でなければならぬことと、その国の修道場が他の仏の国よりとはくらべものにならない立派なものでありたい。というのは、わかりやすくいうと教育の設備を万国一にしたいというようなものでしょう。そうしてこの国での生活は平和で心しずかに浄らかで、何の欲望もなくそれ故に何の心配も悲しみもない、言うに言われない尊く美しくたのしいものであらせたい。

それにありとあらゆる生き物に同情して、いたるところに迷っている者たちをみんなのこらず救いとして自分の国に住ませたい。

という上にあげた三つの事を根本にして、それを具体的にするために四十八の願があるのです。その四十八願の一つ一つはみな、同じように「設シ我レ仏ヲ得タランニ……」という文句ではじまって「……正覚ヲ取ラジ」と結んであります。「自分が折角仏さまになつてみても……（これ位の事が出来ない程ならば）……仏さまにはなりたくない」という

意味です。人類一般のためにこんなことがしたいからこそ自分は今まで修行をして来たのであるが、それが出来ないなら、自分は仏さまになってみてもつまらない。「自分だけえらい仏さまになってみてもつまらない。その利益すべての人類に分配したい」というのです。

その四十八願を一つ一つ説明すればいいのです。けれど、それをわかりやすく言うことがなかなかむずかしいところへ、何しろ四十八あるのですから上手に言わないと退屈しそうに思われてむずかしいから、今は四十八願を一つ一つ順々に言うことはやめにして、それが一つのこらず立派に実現して出来上った国のありさまやその国での人々の生活の状態をここに書いてみることにしましょう。つまり機械の構造の説明は話すにも聞くにもむずかしいから、その組み立てられたところや、運転されているありさまをお目にかけて、説明は必要に応じてその合間合間に入れることにしましょう。

この国は西の方十萬億の国々の彼方にあります。この方角や遠さは別に四十八願のなかにあったわけではありませんが多くの仏の国々がさきに開かれているからこより外に適當なところがなかったのかも知れません。この国にはその道場——修行の場所——に高さ四百万里もある大木があつてこの樹の葉のかがやかに光るみどりは国内の修道者たちの仰ぎ見るところである。ちょうどわが国の富士山が日本の精神的なものを形に現わして見せているような役目をする樹のように思われます。この大きな樹のあることや、それが高さ四百万里もある大きな樹だということを人々に悟ってもらいたいという事は、四十

八願のうちの二十八番目の願になっていました。こんな大きな樹が生えている国というのは常識ではちよつと想像出来ないわけです。この国は常識に捉われて解釈したのではよく理解できない理想国を詩のように言い現わしているので、この国では金、銀、瑠璃、珊瑚、琥珀、碑礫、瑪瑙など自然の七宝が合成して地面になっています。これは法蔵菩薩の四十八願のうちの三十二番目の願がかなって出来たわけですが、普通の言い方にしてみると資源が豊富で風景が美しく整理が完備している事をこういう風に言い現わしたものでしょう。こういう土地が限りなく広々とひろがってただ平に、山も谷も海もないけれど、見たいと思うならいつでも目の前に現れて来ます。

この国には七重棧敷のように枝の繁った街路樹が七重に植えられてあつて、その上にさまざまの宝を飾りつけた薄い織りものの網がかかっているかと思われるほど美しく栄えています。

ここにはまた七宝の池があつて清潔で美麗な水をたたえ池の底には沙金ばかり敷きつめ、そのぐるりの階段は金、銀、瑠璃、波璃などを組み合せて、その上には立派な建築を設けてある。

池には大きさが車の輪ほどもある五色の蓮が青いものは青い光を、黄のものは黄の光を、赤いものは赤い光を、白いものは白い光を放ちながら、いいにおいをあたりに漂わせています。というのは、この国の公園のはなしでもありませんか。

鵠、鵠、孔雀、鸚鵡、鷺鷥などの色さまざまな鳥がいます。なかでも迦陵頻伽というの

古き伝統技

三代にわたる信頼

浄土宗法衣専門

有限
会社

古島法衣店

〒111東京都台東区元浅草4の2の1

電話(03)38421289
振替001802145231

は特別に声のいい鳥だし、其命鳥というのは一羽に二つ首のあるこの国特有の鳥であります。この国には地獄や餓鬼道、畜生道などというものは四十八願の第三の願としてもともとないのですから、この鳥たちも前生の因縁で鳥に生まれ変わったというようなわけではなく仏さまが仏法の教をそのよい声やうつくしい姿で悟らせようという方便でここに遊ばせて置くのであります。ここでは鳥の声ばかりでなく吹く風が木の枝を鳴らしても木々の葉っぱはみな、うつくしい声を立ててこの国の肇国の精神を歌いかなでるのであります。

そのおもしろさはラジオが愛国行進曲をはじめたようなわけあいでありましたが、この国ではずっと大昔からこういう事が行われていたものであります。

こういう国に住んでいる人々はそれではどういふ風にしてその日その日を暮しているのでしょうか。

つづく

旧仮名遣いを全て現代仮名遣いに直しました。
また、幾つかの言葉を現代用語に改めました。
(編集部)

真野先生 パリ講演会



浄土宗フランス開教地（主事 高僧光隆師）では、去る六月六日、浄土宗ヨーロッパ仏教センター（通称・浄土宗パリ）開設二周年記念の講話会が開催された。

昨年の開設記念講話会に引き続き、浄土宗勸学職・大正大学名誉教授で、東京都港区にある天光院前住職であり、当会前会長の真野龍海師（八十六歳）が日本より招かれた。真野師は趣味として絵を描き、主事である高僧師が好きな絵画の活動のため、フランスに渡る前から絵が縁で大正大学時代に親交があった。

会場はパリ中心地、セーヌ川の辺にある【ホテル・シタデ

インヌ・サン・ジェルマン】のサロン・モンスリーにて、仏教に関心を持つフランス人など十二名と在仏の日本人二十三人が集まった。講話に先立つ法要では、阿弥陀仏御尊像を安置し、荘厳を整え真野師を導師に高僧師とともに散華をし読誦・念仏を称えた。

講話会は真野師のフランス語での挨拶に始まり、浄土思想から法然上人のお念仏の教えと、『法華経』の方便品の教えをユーモアを交えながら、またハーモニカによるフランス国歌の演奏を披露するなど和やかな雰囲気の中約一時間にわたり講話した。

そして続く質疑応答では参加者からの積極的な質問に通訳を通じつつ、ヨーロッパでの仏教への関心興味の高さを示す大胆な質問も、機知に富む答えで対応、会はさらに盛り上がった。

今回は日本仏教を研究するフランス人学者の講話質疑や、イタリア在住の浄土宗僧侶の参加もあり、浄土宗パリの活動の広まりと躍動を感じさせた。また参加者から「このような、仏教・お念仏のお話に触れられる機会は、是非続けてほしい」との声がかり真野師は、「ご参加の皆様から大きな力、励みを頂きました。小さな積み重ねですが、遙かヨーロッパの方々に、仏教や法然上人のお念仏の御教えを弘めるとともに、心やすらぐ場に育てたいと願っています。」と結んだ。

遙か欧州の地に法然上人のお念仏の遺跡が築かれるか、希望を感じさせる会となった。

小説 快僧渡辺海旭

壺中に月を求めて

前田和男

第七回

土井晩翠との
交遊録 その2



インド人亡命者、アタールの自死

そんな回想にふけっているうちに、いよいよ番組がはじまった。

光を掲げた人々、今回ご案内するのは「新しい時代の聖者、渡辺海旭」

と番組タイトルが流れると、海旭の留学時代にはじまって、帰国後の嚇々たる業績のエピソードが語られていく。やがて三〇分番組の四分の三ほどがすぎ、大団円に近づく頃――

「土井晩翠先生が海旭先生をたたえた詩に次の一節があります」と先触れがあつて、「雪山恒河タージリン 夢寐に忘れぬ五天竺 印度の志士に一掬の 熱き涙をそそぎけん アタール逝けど……」と晩翠の弔歌が吟じられたのである。

晩翠は思わず背筋を伸ばして、引用された第十節目を目でいった。

すると、アタールと海旭にまつわる物語がこんな具合にひもとかれていった。

東京外国語学校（現・東京外国語大学）ヒンドスターニー（ウルドゥー語）科の教師であつたアタールは、インドからの亡命者であつたため、大正十年（一九二一）六月、イギリスとインドの複雑な関係の板ばさみにあつて自殺。その通夜の席に海旭も連なつていた……。

実はこの背景には、大正四年（一九一五）、インド独立運動の志士、ラス・ビハリ・ボースが当地の英国人総督を襲撃、イギリスの敵対国・ドイツの庇護と大アジア主義を提唱する頭山満ら「国土」たちを受け皿として、来日。海旭も彼らと交遊を結ぶことになる。そのボースの「同志」の一人がアタールだった。当時日本はイギリスと同盟関係にあつたため、英国の意をうけて彼らを国外追放にしようとして探索をつづけていた。そうした追及に耐

え切れず、アタールは自殺したものと推察される。

しかし番組ではこの背景ははしょられているが、晩翠にとっては自明の事実であったので、この「省略」には違和感を覚えずに、その先の展開に聞き入った。

アタールの通夜は寂しいものだった。日本の外務省の意向をはばかって列席者も少なく、彼らの中から明日の葬式の挙行を危ぶむ声があがった。君子なら危うきに近寄らず、である。日本を代表する高僧であればなおさらだ。しかし、海旭の反応は違っていた。「費用は僕が出す」と葬儀の挙行を申し立てたのである。それだけではない、海旭は遺骨を故国のインドまで送り届けようと決然と訴えたのである。

「アタール君によしんば罪があるにしても、死んでしまつたら仏じゃないか。おそらくア

タール君も、海山万里を距てた日本で客死することは、よほど心残りだったことと思うと、可哀相じゃないか。坊主は仏法に生命を託してるんだ。仏の世話をして、その為に、何か浮世の禍を招くようなことがあったとしても、それは坊主としては本懐じゃないか。

元祖法然上人が、八十になつて流され給うた時にも近鄙の人々に仏の教えを知らせることができるといつて、喜びなかつたためしさえあるじゃないか。」

晩翠は往時さながらに、膝を叩いて、海旭の英傑ぶりに胸を熱くした。

やがて番組は海旭の急逝という大団円へと向かった。再び弔歌の第五節、「思ひは深し深川の 浄利君の西光寺……」が厳かに吟じられると、語りが続いた。

「戦争前まで芝中学校の校庭には、渡辺海旭

の胸像がその温顔をたたえておりました。像にはお定まりの没年が刻んでありません。それは芝中学校の職員生徒の胸のうちには、渡辺先生は、永久に生きておられる人だからだということだったそうです。肉体は亡びてもその魂は永遠に学校と共にあるという志だそうです。」

そして、「最後に晩翠翁の頌歌をもう一節、抽出させていただいて終曲といたしましたよ」と弔歌の第十六節、「日輪西に傾むきて懸鼓の如く大空に 燦爛の光放つとき 紫磨黄金のおほひなる 影に伴ふ師を思ふ」と吟じられて、ドラマは全編の終わりとなった。

「渡辺和尚は死んでも生きている」

自ら詩作した弔歌が物語のサビの部分のみならず、結びにも用いられて、晩翠は大いなる充足を覚えた。なにより晩翠の心がゆすられたのは、芝中学の胸像に海旭の没年が記さ

れていないと知ったことだった。海旭は「永遠に生きている」。それは、弔歌の結語に「諦誓上人永く生く」と記したとおりである。ひょっとしたら、この番組の脚本家は、結びの着想を晩翠の詩から得たのではないかいやきつとそうに違いないと、晩翠はひとりうなずくと、頭山満翁が、海旭の百箇日法要に列席して帰るおり、海旭をこう評したことを出した。

「世の中には生きていても死んでいるものがあるが、渡辺和尚は死んでも生きている」。けだしそのとおりである。「海旭は死んでも生きている」。実は晩翠もそれを実感させられたことをある。あのおかげで、今自分は生きていられるのかもしれないと思った。

海旭が逝ったのが昭和八年（一九三三）、あれから戦争をはさんで十余年。たった十年ちよつとだかその間には「万里の径庭」がある、大いなる「地溝帯（フォッサマグナ）」

がある。

それこそが「戦前」と「戦後」という価値観と世界観の大転換が生み出した「落差」であり、その「落差」を生き抜くのは並大抵のことではなかった。戦後の晩翠は「生きにくさ」にどれほど押しつぶされそうになったことか。もっともこたえたのは、詩人・学者にとって命ともいえる書物を失ったことだ。戦争に負けて価値観が変わった時代を生き抜くためにも、晩翠には書物が唯一無二のよりどころだったからだ。

戦争が終わるほんの一月ほど前の七月十日、東北随一の軍都・仙台はついに大空襲をうけた。三月十日の帝都の大空襲で仙台にもこの日の来ることを晩翠も覚悟していた。ヨーロッパ留学時代をふくめ五十年かけて収集した書物は三万冊。そのうち古今圖書集成、四部叢刊、大蔵経などの「大物」は疎開させたが、戦況が悪化して輸送機材が調達できな

くなり、残る重要な書籍はすべて土蔵に入れるよりほかなかった。そして、それは戦火で灰燼に帰してしまった。そのときの衝撃たるや尋常ではなかった。林羅山は蔵書全滅の報をうけて落胆のあまり間もなく他界したというが、晩翠にとっても死を宣告されたに等しかった。

そんな落ち込みのなかで晩翠を救ってくれたのは、関東大震災で万巻の書を失った渡辺海旭のエピソードだった。内田魯庵は「典籍の廃墟」と題する論稿で、海旭は十年余の留学生活などで集めた二万冊を失ったが、その多くがいかに国家の宝ともいうべき重要文献であったかを指摘している。また完成しかけていた「孔雀王経の研究」「理趣経の研究」などの論考も消失した。にもかかわらず、親友の高島米峰からは「渠は実に教門の快漢である。二万巻の蔵書を焼いても恬淡落々々々として教務に努めて忘れたるが如くである」

みられることはなかった。続々と誕生する新制中学・高校・大学の校歌をつくるばかりの不遇をかこつ日々だった。

もし海旭だったら、この生きづらい戦後をどう生きるのだろうか。見てみたいと晩翠は思った。関東大震災の後のように恬淡として生きるのだろうか。

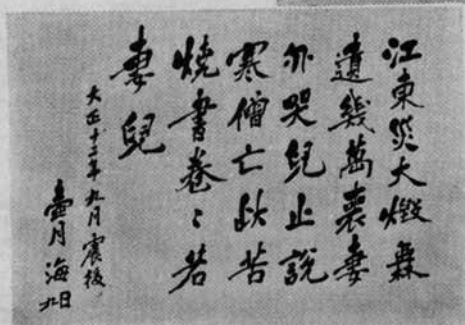
十余年前晩翠は海旭を「伽藍にこもる学僧」ではなく「高僧だてらに大アジアに獅子吼する英傑」として描いて彼岸へと彼を送った。そのときは、晩翠は海旭の「実像」をつかんだ気になっていたが、つかみそこねていたのかもしれないと思いはじめた。渡辺海旭という男はもともととと大きな存在だったのではなかったのか……。

久しぶりの酒に酔って、晩翠はとろとろと心地よいまどろみに襲われ、そのままそれに身をまかせていった。

●前田和男 プロフィール

1947年東京生まれ。渡辺海旭の母校であり校長をつとめた芝中・芝高60期。東京大学農学部卒。翻訳家、ノンフィクション作家、編集者。路上観察学会事務局。資生堂化粧品文化研究会会員。著作：『MG5物語』（求龍堂）『足元の革命』（新潮新書）など。訳書：J・ベルイマン『ある結婚の風景』（ヘラルド出版）など。

故人の筆蹟。下圖は大震災に於て自坊の一切を焼盡せられし時の感懷を
詠じ記されたるもの。



連載

会いたい人 関 容子

佐野成宏さん ②



撮影／タカオカ邦彦

佐野さんは一年の約半分をイタリアのモデナに住んで十年以上になる。

モデナはあの大テノール、ルチアーノ・パバロッティと、名ソプラノのミレッツァ・フレリーニの出身地。この二人が時と所を同じくして生まれ、しかも同じ乳母のお乳で育ったということは、オペラファンの間ではもう有名な話になっている。

「両方のお母さんが同じところで働いていたので、子供の面倒をみってくれる女性が同じ人だった、ということでしょうね。モデナの町には、小さいころのミレッツァやルチアーノを知っている、という人が今もいっぱいいますよ。パバロッティの生家はパン屋さんです。お父さんのフェルナンドは小柄だけどいい声のテノールで、地元ではルチアーノより評判が上でした。有名な町の合唱団のテノールなんですけどね」

佐野さんは二十年近く前、このフェルナンドに会って、声も聞いたことがあるという。

「ぼくがまだ武蔵野市民合唱団にいた90年の夏、初めてハンガリーへ演奏旅行に行くことになったんです。そのころソプラノの故東敦子先生に師事してましたから、あなた、せっかくヨーロツパへ行くのなら、アリゴ・ボーラ先生がモデナにいらつしやるから、行ってきたら？ とすすめられて、ぼくは一人で電車を乗り継いでモデナへ行きました。それでびっくりしたのは、ボーラ先生が日本語がしゃべれる、つてことでした。それもそのはずで、先生は藤原歌劇団で長いこと、藤原義江さんと同じ時代に歌ってらしたテノールなんですから。来日の前にはパバロッティが師事したこともあるそうで、彼が音楽の道かサッカーの道か、進路に迷つてたのを、ボーラ先生が音楽界に引つ張つたんだそうです。それほどほんとうによかったですよ」

そう言えば90年、ローマでのサッカー・ワールドカップ決勝戦前夜祭で、まだ若々しかった三大テノール（パバロッティ、ドミンゴ、



今年の6月～7月、佐野さんは兵庫県立芸術文化センターや東京文化会館で「カルメン」のドン・ホセを歌って好評を得た
撮影：飯島隆 提供：兵庫県立芸術文化センター

撮影：飯島隆 提供：兵庫県立芸術文化センター

カレーラス)の第一回コンサートが花やかに行われたが、そういう因縁によるものだったのだろう。

それにしても、佐野さんもボーラ門下になるわけで、つまりはババロツティと同門、というのがすごい。

「ボーラ先生のところはオーブン・レッスンでしたから、部屋のまん中にピアノがあつて、まわりのソファアに何人もお弟子が掛けて順番を待つんで、ひとのレッスンが聞けるんです。一人一人みんな声の響きが違うので、そうすると、こういう声の人はこういうレパトリを歌うんだな、ということが自然にわかってきて、いい勉強になりました。オペラ歌手の場合、一番大事なのがレパトリ選びなんです。自分の声の質に合わないものを無理して歌っていると、早く声を失くすことになるんです」

佐野さんのレパトリはリリコ・レッジーエーロ。叙情的でやや軽めの柔らかな声の質

の持ち主で、ヴェルディ言えば『椿姫』『仮面舞踏会』『リゴレット』などは合っているが、強い声が必要とする『オテロ』には向かない、ということか。

「最初の年、ぼくはボーラ先生のお宅の近くに二週間滞在して、そこから通ったんですけど、そのときにババロツティのお父さんを見たんです。彼はボーラ先生と仲よしなので、ときどき知り合いを何人か、オーディションみたいに連れてくるんですね。でも結局最後には自分が気持ちよさそうに二、三曲歌って、満足して帰って行く。しかし、強くて丸くて豊かないい声で、若いころはさぞ素晴らしいテノールだったことでしょうね」

’92年、佐野さんは芸大の大学院一年のとき、イタリアのバルマ音楽院に留学する。バルマはモデナの隣り町で、生ハムの名産地。地元でしか味わえないおいしい料理やワインにも魅了され、どんどんイタリアにのめりこんだ。

「上手に歌うコツというのは、まずその国の言葉できちんとしゃべれることなんです。イタリアオペラを志す者が、イタリアに住むことは大事です。音楽の勉強のためよりも、むしろそのために住みたいなものです」

93年、美香さんとモデナで結婚式を挙げる。

「モデナに居を定めてたので、ポーラ先生のレッスン友だちがみんなで祝ってくれました。とにかく門下生たちのコンサートとなると、彼女が全部ピアノ伴奏を受け持つて、三日間で五十曲近くも弾かされてクタクタになったりしてたんで、結婚となったらみんながとても喜んでくれました。日本では、横浜でまず披露宴をして、合唱団の人たちとか、多くの故郷とか、五回くらいパーティーをしましたかね（笑）。彼女とは東京音大のころからグループでつきあってましたけど、とても気が合って、仲がよくて、今もそのころとつきあい方がまったく変ってない感じです。好きなものが一緒、というのがいいんでしょう。

ね。こういう歌い回しがいいね、とか、ああいうのはいやだね、とかいう感性が一緒なんだと思う。何しろイタリアの女の人のように明るくて、よく笑うし、血液型がB型のせいかすぐ突飛なことを始めるので、A型のぼくが慌てて止める毎日です（笑）」

ある日、佐野さん夫妻と待ち合わせたら、車からまず大柄でダンディな佐野さんがサツと降り立ち、スマートに手を差しのべて美香さんをエスコートするところは、さすがイタリア生活が身についた感じだった。

美香さんによれば、「イタリア男性は女性をととても大切にする」のだそうで、それで明るく平和な家庭が成り立っているのだという。

美香さんが言う。

「『マンマ』というのがありますでしょう。へマンマぼくは幸せ、マンマ、ぼくの唄より美しい……って。イタリアの主婦というのは、話も達者、冗談もうまいし、面白くその

場を盛り上げるんですね。お料理もうまいし、家事能力が万全で、うちの中はピッカピカ。だから家庭の中心にドンと存在してるんです。ポーラ先生は'99年に八十歳で亡くなられたんですが、シニョーラは九十近くで今も健在で、まさにマンマの代表格です」

イタリアの老人ホームに音楽の慰問に行く
と、おばあちゃんたちから必ずリクエストされる曲がこの『マンマ』なのだそうだ。

「ぼくはイタリアが大好きです。歴史があつて文化があつて、町並みの中に古いローマが少しも特別な感じじゃなく同居してる。地震国なのにあれだけ昔の建物が残っているのはすごいですね。海があつて、おいしい食べ物があつて、いいワインがあつて。シニョーラ・ポーラが言つてました。イタリアは最高の国よ、イタリア人がいなければね、つて（笑）。もちろん被虐的にユーモアで言つてるだけですけどね。ぼくはイタリア人の柔軟さのほうで、日本人の融通のきかなさよりよほ

ど好きですよ」

結婚の翌年、佐野さんはドミンゴ・コンクールに挑戦。予選予選を乗り切るのに、美香さんの支えはとても大きかったに違いない。

「まず日本予選が所沢であつて、五人が残つて、次がヨーロッパ予選。各国からの四十人くらいがウィーンの国立歌劇場で、お客を入れてオーケストラの伴奏で歌うわけなんです。その前にそれぞれが練習場所を与えられて、ピアノ伴奏で練習すると、あの忙しい、分刻みのスケジュールのようなドミンゴさんがアメリカから飛んできて、一人一人にアドバイスしてくださるんです。君はこういうふうに歌ったほうがいい、とかね。すごく誠実で、エネルギーシユなにはびっくりさせられました。ぼくはドミンゴさんお得意の『ルイザ・ミラー』の Aria を歌いました。それで最終の十一人の中に残ったんです」

半年後、メキシコで本選があつた。

コンサートでの仲むつまじい佐野夫妻



「今度は曲目を変えて『ボエーム』の『冷たい手』を歌ったんですが、前日から体調を崩して、最後のところを失敗して入賞は逃しました。でもファイナリスト（決勝出場者）は入選ということになるんです。このとき優勝したのは『西部の娘』を歌ったホセ・クルラですからね、競争相手として不足はなかったです」

佐野さんはその翌年のパバロッティ・コンクールやバルセロナの国際コンクールなどに

出場し、いずれも好成績だった。そしてパルマ音楽院在学中の二年目（95年）、日本から藤原歌劇団『椿姫』出演の依頼が入り、花々しくオペラデヴェューを飾った。

「オペラ歌手として自分を意識し始めたときから、理想としているのはパバロッティです。彼の声は明るく光り輝いてますよね。テノールというのは声が輝いていないといけないんです。パバロッティの声は、聞いた瞬間にイタリヤの太陽を連想させますでしょう。話は音に戻りますが、テノールというのは朝がとても苦手なパートで、朝の九時から歌うなんてことはとても大変なんです。しかし芸大の受験のときなんかはやむを得ず歌わされるわけですからね。そういうとき、ぼくは課題曲と同じアリアを歌っているパバロッティを、ウォークマンですつと聞いていたんですよ。すると不思議なことに、ぼくの声帯がだんだん温まってきて、それでパバロッティの高音をイメージして歌うと、発声練習はして

ないのにちゃんと声が出たんです。そういう有難い声なんですよ（笑）」

佐野さんはこの夏初めて『カルメン』（ドン・ホセ）を歌って、好評を博した。

「フランス語は難しかったんですけど、歌ってみてその面白さがわかったので、今後『ウェルテル』や『ホフマン物語』も歌ってみたいと思いました。でもぼくにとつて一番好きなオペラは『仮面舞踏会』で、これはいろんなテクニクを駆使して歌わないと、聞いていても面白くないオペラなんです。しかしこれがきちんと歌えれば、ヴェルディのニュアンスがきちんと伝えられたことになる……」

つまり、佐野さんの人生の課題曲ということか。

「ええ、最大の目標とも言えますね。ミラノ・スカラ座のような超一流の耳の肥えた天井桟敷のお客に、『仮面舞踏会』を歌ってブラボー！ と叫ばせたい、それが夢です」

（この項、おわり）

念仏申す機は、うまれつきのままにて申すなり。…智者は智者にて申し、愚者は愚者にて申し、慈悲者は慈悲ありて申し、邪見者は邪見ながら申す、一切の人みなかくのごとし。さればこそ阿弥陀ほとけは十方衆生とて、ひろく願をおこしませ。

法然上人「禪勝房に示す御詞」

お念仏を称える者は、生まれついたそのままでお称えするのです。…智慧ある者は智慧あるままにお念仏を称え、愚かな者は愚かなままにお念仏を称え、慈悲ある者は慈悲あるままにお念仏を称え、邪な者は邪なままにお念仏を称える。すべての人はみなこのように、あるがままお念仏を称えるしかないのです。だからこそ、阿弥陀さまは、広くあらゆる世界に生きる衆生を救うとの念仏往生の本願をお誓いになられたのでしょうか。

いやになったところで

その日はことのほか暑かった。家の中にいても喉の奥がねばつく。キンキンに冷やした水を一気にがぶ飲みしたいと思った。

「そうだ、空のペットボトルに水を入れてシャーベット状に半分ほど凍らせてみよう」。早速、ペットボトルに水を入れて冷凍庫の扉側の棚に差し込み、頃合いを見て取り出した。「ちょっと凍りすぎたかもしれないけど、まあまあ、イケテル、イケテル」。凍り付いたキャップをギョツとひねり、一気に口にもっていく。もちろん、半分凍りかけの冷水がドカンと脳天を刺激するはずだった。

だが、それがウンでもなければスンでもない。冷たいとか冷たくないとかいう次元ではなく、一滴の水すら口に入らないのである。ボトルを覗くと飲み口部分が全面結氷。水が飲み口に栓をして、冷水を通せんぼしていたのだ。どうりで、ウンでもないスンでもないはずである。

ペットボトルには始め六分目程度の水を入れておいた。一杯にしなかったのは早めに凍らせておきたかったのと、凍りかけた水と氷をバーテンダーよろしくボトルのままシェイクする余裕をもたせようと思ったからである。

ボトルを取り出した時、多少凍り過ぎた気もしたけれども凍りかけの冷水も

ほどよく残っていて、目論見は上々の仕上がりだった。ただボトルは冷凍庫の扉の棚で横に倒れていた。元来、整理整頓が苦手な面倒くさがり屋の私は、棚に保冷剤が置いてあったその上にペットボトルを差し込み、勢いよく扉を閉めたのだ。きつとその時、ペットボトルが倒れて飲み口が下になり、その部分の水が凍りついてしまったのだろう。ペットボトルを取り出した時、まだ凍っていない水はボトルの下の方に移動したものの、飲み口で凍った氷は栓となつて残されたのだ。

せっかく作つたキンキンの冷水も、飲み口の氷が溶けないことにはどうにもならない。最初の目論見は文字通り元の木阿弥となつた。

一事が万事とは言わないが、この手の失敗はよくある。そのたびに「いつも、そうなんだ」と忸怩たる思いに苛まれる。整理整頓が下手だから大事な物が見つからない。面倒くさがり屋だから一手間抜いて物事を台無しにする。冷凍庫の扉の棚の保冷剤を見た時も何となくやな気がしたのに、保冷剤をどかし、てボトルを差し込むという一手間がかけられない。

どうして、そういう質^{たち}なのか、自分で自分がいやになるのだが、お釈迦さまの教えに「ただ謗られるだけの人、またただ褒められるだけの人は、過去にも

いなかったし、未来にもいないでだろう。現在にもいない。」（中村元訳『ダンマパダ』第二二八偈、岩波文庫）というお言葉がある。ありとあらゆる人を見渡したところで「完璧っ！」という人はいないし、「まるつきりダメ」という人もいない。誰にでも一長一短があるということだろう。そう考えると、自分にいやなところがあっても、少しは気が楽になる。

「うまれつきのままにて申すなり」。これって、「自分で自分にいやなところがあってもそのまま申せ」と置き換えることはできないだろうか。智者や慈悲者にしたところで人として「もう完璧っ！」というわけでもないだろし、愚者や邪見者だって「まるつきりダメ」というわけでもないだろう。

智者や愚者、慈悲者に邪見者。それぞれ長所短所をさまざまに抱え込んだ人間一人一人の、そのほんの一端を言い表しているのではないだろうか。

自分のいやなところ、気になるところ。あなたは気にしても、阿弥陀さまはそんなこと全然気にならない。「うまれつきのままにて申すなり」と説く時、法然上人はそう言い添えたかったのではないだろうか。（浄土宗総合研究所 袖山榮輝）

味噌汁は日本人の「ソウルフード」

昨年、新聞だったか何だったかは憶えていませんが、日本人の海外旅行者に対して「日本に帰ったら、まず何を食いたいかな？」と聞いた調査結果を見て、妙な感動を覚えました。その一位が味噌汁だったからです。近年は世界的に日本食ブームですが、外国の人たちにとってのそれはサシミやスシ等々であっても、たぶん味噌汁なんて入っていないでしょう。しかし多くの日本人にとっては味噌汁だった——この調査結果に「そうか、味噌汁は日本人にとってソウルフード（魂の根幹を支える食）だったのだ」と、あらためて思ったものでした。

味噌汁は基本的に家でつくり食べる日常食であり、日本独特の伝統食です。なぜ日本独特かについては後述しますが、日本における味噌のそもそもはよくわかっていません。奈良時代の文献にある「未醤」という文字が日本ではもともとも古い記述だそうですが、味噌は中国をルーツとし、朝鮮を経て入ってきたと一つには考えられています。

この未醤の「醤」（日本語では「ひしお」）は、

もともと中国で食材を塩と麴で漬け込み、発酵させた食品や調味料のことで、肉のそれは「肉醬」、魚は「魚醬」、穀類ならば「穀醬」、野菜などは「草醬」で、これでは味噌は穀醬です。そして中国でも朝鮮半島でも味噌のことは「醬」（発音はジャン）と言います。「豆板醬」トウバンジャン「甜面醬」テンメンジャンなどがそうですし、朝鮮の辛みそは「苦椒醬」です。もう一つ、中国の言葉に「豉」（和名…くき）というのがあります。穀醬のうち大豆のそれをこう呼ぶようになったとされていますが、中国の食材に「豆豉」というものがあり、嚙ってみると京都の大徳寺納豆に代表される、糸は引かないいわゆる「寺納豆」に似ています。中華料理では例えば「牡蛎の黒豆炒め」の黒豆が、この豆豉で、製法的にはこれが味噌の原型ではないかとも考えられています。

味噌とは何か、ひとことで言えば「大豆を原料に塩と麴を加えて発酵させた調味料」です。米味噌、麦味噌というときの米や麦は発酵に使う麴の元で、原料はあくまで大豆。

そこで「味噌汁は日本独特の伝統食」という話です。中国でも朝鮮半島でも味噌は「醬」なのに、日本はなぜか「味噌」であり、この「味噌」という文字は日本でしか使われず、かつ「噌」の字は味噌にしか見られないのです。つまり日本独特の呼び名であり、もともと古い記述が「未醬」(ミソ?)だとすると、もともとミソという言葉が日本にあって、渡来したこの食品に与えたのではないか……というのは、根拠も何もないほくの想像ですが、まずは味噌という言葉の問題。次に食べ方で、味噌を汁に仕立て、つまり味噌汁として食べるのは実は日本だけなのだそうです。

味噌は昔の日本人にとって貴重なタンパク源で、そのまま嘗めてごはんや酒の友にしたり、豆腐や野菜に塗って食べたりしていました。これを「嘗め味噌」と言い、戦国時代には梅干し同様、兵糧として重宝され、武将たちもその生産を奨励して、武田信玄の信州味噌、伊達政宗の仙台味噌はその代表です。

しかし、昔の味噌はつぶつぶが残る粒味噌だっ

た。だから、嘗め味噌ならともかく、汁にするにはすり鉢で搗らなければならなかった。そのすり鉢が生まれるのが鎌倉時代。この時代に禅僧らが粒味噌をすり鉢で搗って水に溶いて料理したのが味噌汁の元であり、これによって味噌が汁物として食事に組み込まれ、これが華美文化を嫌った鎌倉武士たちの志向にあって「一汁一菜」の食事形式が生まれた——というのです。ね、日本独特でしょう？

近年、味噌の効用についてはさまざまに研究され、抗がん効果を始めいろいろ言われていますが、昔の人はそれを知っていて「味噌汁は朝の毒消し」「味噌汁の医者殺し」なんて言葉が江戸時代にあります。「味噌の三礎」というのもあって、これは味の礎、命の礎、美の礎を意味します。つまり日本人は味噌のおいしさだけでなく、健康や美の礎であったことを体験的に知っていたのです。

もう一つ、味噌汁の楽しさは、その具というか実なのですが……残念、そこまで語る紙幅がありません。

江戸を歩く

上野から谷中へ

大江戸ウォーカー
森清鑑

不忍池、花見

上野の山といえば、江戸人にとっても一番の桜の名所。いわば花見の元祖的存在である。広重は何枚も描いている。ところが寛永寺は將軍の菩提寺。花見の季節の時だけ、黒門を開き、一般庶民の入山を許した。それも暮れ六ツ（夕方六時）まで。一応、酒は許されたが、魚を食べ、三味線を弾いたり、騒ぐことは許されなかった。皆、しずしずと純粹に花見を楽しむ。したがって老人や女性が多い。広重の絵も清水堂の下を描って歩く女衆の姿を描いている。自由に飲み食い、騒ぎたい若者は飛鳥山や大川土手で花見の宴を繰り広げたのである。それでも多くの江戸っ子が見事な桜を見に詰めかけた。

落語「長屋の花見」は上野の山を舞台にし



◆江戸名所図会 不忍池中島并財天、島の周りを茶屋が囲んでいる。

ている。貧乏長屋の大家が住人を誘って上野に花見としゃれこむ。大家がめずらしくも酒三升を用意したというと皆大喜び。ところがこの酒は番茶を薄めたもの。お茶が盛り。玉子焼き、蒲鉾は沢庵と大根のコウコ。意気が上がらないことおびたらしい。「熱燗をつけねえ」と大家。「煎じた方が」と住人が返す。「どうだ、灘の生一本は」「宇治かと思った」「一句どうだ」、「歯を食いしばる花見かな」といったあんばい。下げは、一人が湯のみをじっと見て「大家さん、近々長屋にいいことがあります」「そんなことがわかるかい」。「酒柱が立ちました」。規則が厳しい処だけに、この落語もあながちうそではない。

不忍池は家康が入府した頃は現在の三倍もあったという。春は桜、夏は蓮、秋は紅葉、冬は白鳥。この風光明媚な景色は多くの絵に残されているが、弁天島の周囲を茶屋が埋め尽くしていた。景色を眺め、飲食するに止まらず、いわゆる出合茶屋。逢瀬を楽しむ男女

にとって絶好の場所であった。茶屋は湖面にせり出して造られており、かなりの風情。うっとりしていると寛永寺の時の鐘。最初にこれから時を告げるよと鐘を打つ。これを捨て鐘という。「捨て鐘の飛び上がらせる出合茶屋」。帰るにも時間がかかる。時を忘れて長居してしまう人達も多くいた。



①江戸名所図会の俯瞰方向

谷中天王寺（感応寺）

不忍池東端の道を寛永寺に沿って歩く。道の右側が寛永寺、左は池。鮮やかな緑と水景の清々しい色調。そよ風に乘って聞こえてくる時の鐘。池を過ぎると道の右側は寛永寺子院群。子院のひとつ護国院の塀沿いに歩く。不忍池から流れ出した細い小川がこの塀沿いをさらさらと流れ、小堀の役割を果たしている。左側一帯は御奉者番、三河吉田藩松平伊豆守七万石の一万八千坪屋敷塀。屋敷が終わると夥しい数の寺が密集している谷中の寺町である。寛永寺子院の壁に沿ってさらに進むと、天王寺山門にぶつかる。その手前、左に折れる道が谷中三崎町通りである。道沿いに天王寺山門前町が展開する。天王寺山門を潜ると長い参道。左右は天王寺子院。右手に有名な五重塔。そして毘沙門堂、中門と続き本坊に至る。谷中天王寺の敷地は現在では想像もつかぬほど大きい（約三万六千坪、現在は谷

中墓地）。本坊を開む子院は十寺。天王寺は鎌倉時代に建立。感応寺と称した。開山は日蓮の弟子、日源（目黒円融寺と同じ）。大伽藍にしたのは九世、日長上人。上野の山で辻説法を行い、浄財を集め、正保二年（一六四五）に五重塔を創建。家光は日長に帰依し、感応寺を度々訪ねている。ところが元禄の頃、不受不施事件で幕府の弾圧を受け、取りつぶされる。これを惜しんだ、隣接の寛永寺貫首、輪王宮が天台宗として存続。時至って、天保四年（一八三三）に、感応寺は天王寺と改められた。したがって江戸庶民にとっては感応寺が馴染み深い。

最初の五重塔は、明和九年（一七七二）、目黒行人坂の大火で焼失。だが、棟梁、近江の国八田清兵衛を中心とする四十八名により、寛政三年（一七九二）に再建される。幸田露伴の名作「五重塔」はこの事業を描いている。高さ約三十四メートルという武蔵の国でも有数の高さを誇り、その均整のとれた瀟

◆不忍池中島弁財天の茶屋の風景



◆江戸名所図会 谷中感応寺。中央、東西の道が不忍池から来た道。左の山門を過って天王寺に入る。右手川沿いに上に行く道が芋坂口。川の右は寛永寺子院と徳川家御裏方御簾屋。山門の手前左に入る道が谷中三崎町通り。茶屋多しと書かれている。

洒^{しや}な姿は江戸中の評判となり、谷中の五重塔といえは一人として知らぬもの無しというほどであった。その後、暴風にも絶え、上野の戦では天王寺の本殿まで焼け落ちたがこの五重塔は残った。しかし、一九五七年、男女二人の放火心中で灰燼に帰した。

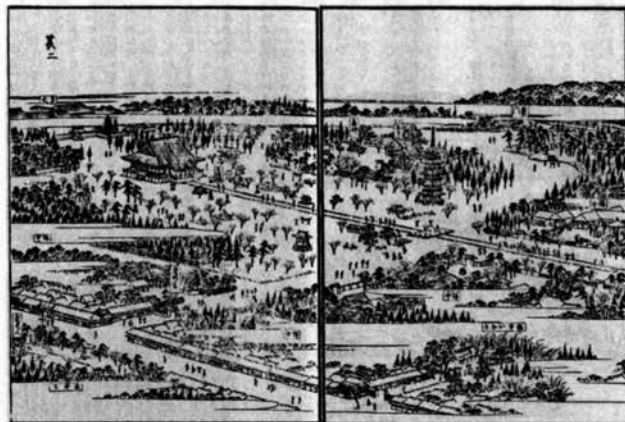
感応寺といえは富籤^{とみくし}である。言うまでもなく目黒不動、湯島天神と並ぶ江戸の三富^{さんとみ}。しかも享保の改革など富籤の自肅が求められたとき、ここだけは逆に毎月興業という破天荒なことをやっている。そのためもあるうかこの富籤は熱狂的な感を呈した。門前町に茶屋が多く立ったのもうなずけることである。

笠森お仙

江戸の絵師、鈴木春信が描く、お仙は美しい。江戸中に鳴り響いた美女である。お仙がいた水茶屋「鍵屋」は、なんと天王寺子院、福泉院内にある笠森稲荷の境内にあった。天王寺の門を入り、長い参道を行くと、両側に

は子院が並んでいる。左側四番目の子院の西側に隣接しているのが福泉院である。長谷川雪旦は名所図会でこの笠森稲荷を細かく描写している。お仙が目当ての人は、天王寺山門

前を左に曲がり、右に転じると、天王寺山門前通り。左手に長安寺、常在寺。そして右手を見ると、欄門に続いて短い参道と正面突き当たりに笠森稲荷。門入ってすぐの参道左手に細長い茶屋があり、これが鍵屋である。お仙は、この鍵屋の娘で湯茶をもてなす看板娘。その清楚な身のこなしのあでやかさ。江戸っ子は彼女見たさに笠森稲荷に参詣。いつしか



◆江戸名所図会 中央右から参道。突き当たりが本堂。途中左右に横切る道が裏門と門前町に繋がる道。その交差上が五重塔。下が塔中。子院、福泉院。そして笠森稲荷。稲荷から門前町通りに出る右手が鍵屋。下、門前町通りの左手が長安寺、常在寺。

彼女のことを「笠森お仙」と呼ぶようになった。春信は、お仙の錦絵を十枚以上も描いている。さあ、それからというものの絵双紙、双六、果ては歌舞伎にまで取り上げられ、お仙の評判はブームとなった。お仙は十三歳から十九歳までここで働く。いわば江戸の美少女

の情報機関に務める亭主と幸せな結婚生活を送り、九人の子宝に恵まれ、文政十年（一八二七）、虎ノ門前の武家屋敷にて七十七歳で没している。

山岡鉄舟

アイドル誕生、第一号である。浅草観音様門前の楊枝屋の看板娘「お藤」、蔦屋の「お好し」と並んで明和の三美人と評判を取る。太田南畝も「半日閑話」でお仙とお藤を並べ、実は「笠森の方美なり」と註をつけている。ところが二十歳になるとお仙は忽然と茶屋から姿を消す。お仙見たさに来た江戸っ子は、稲荷を詣で茶屋に入ってみると、そこには、はげ親父がいるばかり。「とんだ茶釜（お仙）が薬罐（はげ親父）に化けた」という流行語まで誕生した。お仙はどうした。ところがお仙は、將軍直属の旗本御庭番、倉地政之助に嫁いだのである。倉地家は笠森稲荷の祭主であった。お仙は、御庭番という、いわば將軍

天王寺山門前、左に入る道が谷中三崎町通り。ここを歩くと不忍池と繋がっている谷戸川にぶつかる。その途中、左が本通寺、右が谷中天王寺新門前町である。明治になってここに全生庵を建立したのが山岡鉄舟。勝海舟、高橋泥舟とともに幕末の三舟と称された人物。海舟の書簡を持って、官軍直中を突き抜け、西郷と面談。無血開城の先駆けをなした胆力の人である。身長は六尺を超え、剣の達人。この人のやることは半端ではない。剣、禅、書。全てについてである。剣は九歳から直心影流を学び、長じて千葉周作に北辰一刀流を、そして終生の最高目標、中西派一刀流の浅利又七郎に負けて、弟子入り、ついには



◆鈴木春信「おせんの茶屋」(東京国立博物館) 武士をもてなすお仙

又七郎をして参ったと言わしめた。最後は無刀流の域に達している。彼の道場での猛稽古は有名で、晩年に至るも一度竹刀をとると怒濤のごとくなぎ倒したという。ある日、かわいがっていた清水の次郎長に聞く。お前様は随分と修羅場を潜っているがどのような剣を使ったのか。次郎長は「やくざ剣法でして、刀を突き出す。ぱっと来た奴は叩き切る。じっと構えた奴には到底かなわぬのでさっと逃げ出しました」と答える。これを聞いて鉄舟は感心したという。書にしてみさかりである。百万枚を超える揮毫の数は半端ではない。禅、またしかり。幼き頃から修行を積み、無の境地に達する。他人の吐いた反吐をぱっとすくって弟子達の前で口に運んで見せたという。結跏趺坐のまま息を引き取ったのである。海舟や西郷は、その無欲の行動力に驚嘆しているが、それも希に見る自己陶冶から生まれたもの。明治十六年、維新に殉じた人々を弔うため全生庵を建立。山門を入り、直進すると

その奥に墓がある。手前には鉄舟を師と仰いだ三遊亭円朝の墓。ある日、円朝の咄をじつと聞いた後、鉄舟はぼつりと言った。「お前の咄はうまいが面白くない」。それから円朝の大名入への道が始まる。なにしろ明治天皇を殴って鍛えた人である。戒名は「全生庵殿鉄舟高歩大居士」。

螢沢

谷中三崎町通りを真っ直ぐ行くと、谷戸川に沿って右に曲がると下駒込村の田畑。この辺りと天王寺領域は東西並行の位置関係にある。その間に多くの寺が存在している。川は藍染川と名を変える。そこが螢沢と呼ばれる、螢の名所であった。螢沢は宗林寺に隣接している。江戸では螢は至る所で見られた。しかし、特にここには「螢沢」と呼ばれるほどの景観があった。雪旦も団扇を手にして螢の光を愛でている人々の姿を描いている。芭蕉の句もある。今日では想像もつかぬ光景ではある。

【参考文献】

「山岡鉄舟」大森曹玄著 春秋社
「春信 美人画と艶本」新潮社

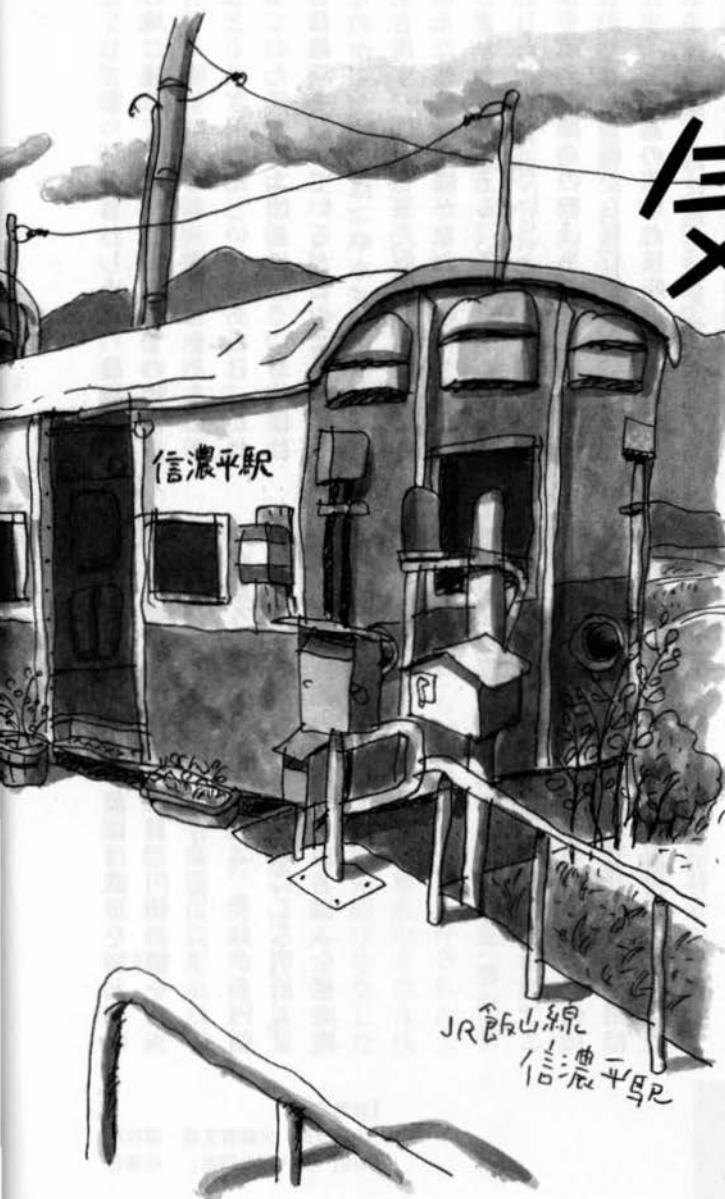


◆江戸名所図会 螢沢

変な駅 気になる駅

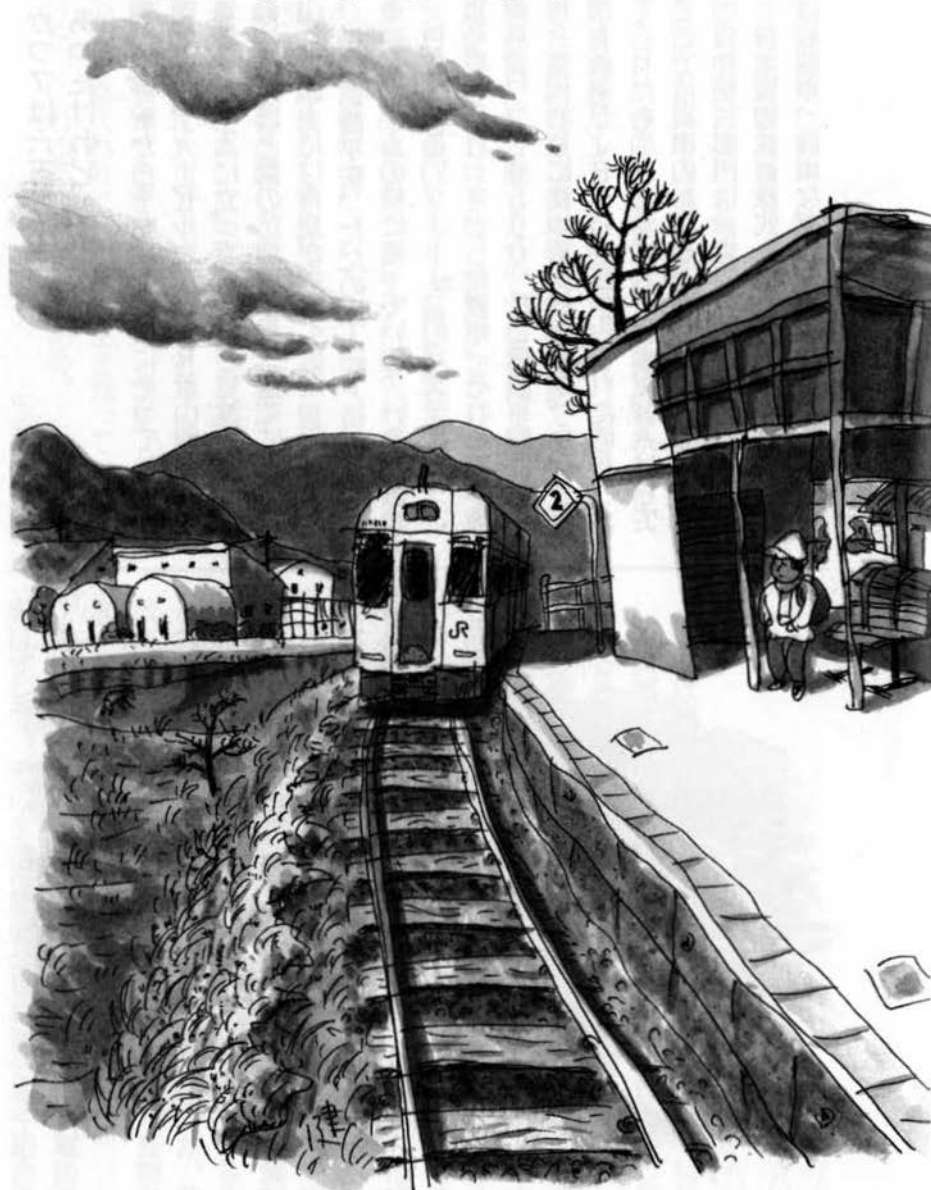
《凸凹コンピがおくる駅前シリーズ第三弾》

え 村上 健
ぶん 長谷川 裕



JR飯山線
信濃平駅

飯山線 信濃平駅



かつては六百五十両も
あったけれど

信越線の長野駅から千曲川の絶景にそって一時間弱。二両編成のディーゼルカーはJR飯山線、信濃平駅に着く。ホームに立ってぐるりと見渡すと、目に入るのは田んぼと菜の花畑ばかり。遠くには信濃の青い山々、頭上には青空が大きく広がっている。

さて、この信濃平駅、ただの無人駅と思いきや、奇妙なモノがホームの横に建っている、いや、置いてある。色こそ明るいツートーンのパステルカラーだが、よく見るとれっきとした貨車、それも車掌車だ。車両形式ワフ29500。ここ信濃平駅はこのワフを待合室代わりに使っているのです。

日本国有鉄道がJRへ分割民営化されたのち、大量に捨てられたものがある。人と貨車だ。人はさておき、ここでは貨車のお話をということ。

国鉄の貨物輸送部門は、貨物輸送を専門とするJR貨物Ⅱ日本貨物鉄道株式会社として独立した。JR貨物は機関車、貨車などの車両は保有するが、駅



千曲川

舎や線路は持たない（一部に貨物専用線を保有するが）第二種鉄道事業者だ。JR各社に線路の使用料を払って、全国に貨物を輸送する。

JR貨物は従来の貨車をほぼ全廃した。ワム、チキ、トラ、タキ等々、荷物に応じて種々雑多な形式のあった貨車をコンテナひとつに統一、合理化したのである。貨物列車は操車場まで機関車で引いてきて、行き先別に切り離したり、つないだりして編成するのだが、それでは手間と時間がかかりすぎ、とうていスピードの速いトラック輸送にかなわない。そこで車両はそのまま、コンテナだけ入れ替える方式に切り替えたのだった。

かくしてあの懐かしい黒塗りの、長い貨物列車は全国の鉄路から姿を消し、余った貨車は捨てられて、哀れスクラップとあいになった。このワフ29500形式、国鉄時代に六百五十両も作られたのだが、そのなかのスクラップ化をまぬがれた一台が、ここ信濃平駅の待合室代わりに使われて生き残っているというわけだ。いわゆる廃物利用である。

ぶざまでいいです、
お気楽です

鉄道は廃物利用がお手のものである。本州では珍しい廃車体利用の待合室も、北海道にはけっこう例があるそうだ。ホームの屋根を支える構造材に古レールが使われているのは誰でもご存じだろう。山手線の上野駅、代々木駅、新大久保等々、いろんなところで古レールが使われている。これらの古レールの中には、明治時代、外国から輸入された文化財的価値のあるモノもあるそう。いや、丈夫なものですな。

いま、復元工事が始まった東京駅。かつては荘重なドーム屋根であったのが、第二次大戦中の空襲で焼け落ち、応急修理で平板な角屋根となっている。これから辰野金吾の原設計を再現するわけだが、敗戦直後の修理に使われたのが、もはや無用の長物となった軍用機のジュラルミンだったそうだ。

廃車になった電車や客車の車体は、台車や電装品をはずして、そのまま保線区の資材置き場や組合の

集会所などに使われた。よく地方鉄道などに見られた風景である。

敗戦直後、教室不足に悩む小学校の教室代わりに、廃車となった客車が提供されたりもしたそう。ガラス窓も付いているし、ドアも付いている。作りはもともとしっかりしているから、校庭に置くだけでいい。客車に乗って授業を受けた子供たちもきっと楽しかったんじゃないだろうか。

そういえば、少し前まで山手線恵比寿駅のビール工場の側線には食堂車が留置され、ビアホールになっていた。あれもおもしろかったが、残念なぐらいまはなし。

いずれにせよカッコをつけずに無理せず行こうという廃物利用は楽しい。肩肘張らず、こんなもんでいいのさと気楽にさせてくれる。

いわゆる

「緩急車」とは

というわけで「待合室」に入ってみる。筆者は電車、客車、寝台車に乗ったのは数知れないが、車掌

車に乗ったのははじめてである。いや、なかなか楽しいです。窓には日よけのヨロイ戸が残っている。ガラガラ開けたり、閉めたりしてみる。ああ、なつかしい。昔の客車はこうだった。貨車なのに天井に電球の取り付け金具があるのは車掌車だからだな。室内はきれいに掃除されていて、地元の人が大事に使っているんだなとわかる。

外に回ると、しっかり赤いテールランプのレンズも残っている。台枠には「ワフ29737」と、いにしえの形式番号がはっきり確認できた。

この貨車、車掌車と貨車を兼用した「緩急車」というやつだ。緩急車とはブレーキをかけたり、緩めたりすることができる車両で、昔の機関車が牽引する列車には貨車、客車を問わず、かならず組み込まれていた。

草創期の列車は機関車から直接、列車全体にブレーキをかけることができなかった。ブレーキがついているのは機関車だけで、貨車や客車は空走するだけ。それではあまりに危なっかしいということで、編成中にこの緩急車を何台か組み込み、汽笛の合図

でブレーキ手がいっせいにブレーキをかけていた。

そのうち真空ブレーキなどの直通ブレーキが開発され、機関士は運転台から直接ブレーキがかけられるようになり、汽笛で合図する必要もなくなったのだが、安全のために車掌の乗った緩急車は長らく使われ続けたのだ。

古い世代の人なら覚えていると思うが、車掌室の壁に紐でつるされたカラスウリのような形をした赤い握りがあったでしょう。あれは緩急車に付いている車掌弁というブレーキで、あれを引っ張ると列車



が急停止するのである。

敗戦直後、誰もが飢えていたとき、ヤミ米の買い出しが盛んだった。買い出し部隊を満載した列車が都内に入る手前の駅で警察の手入れがあり、着物や腕時計などと交換して、やっとのことで手に入れた命の綱の米を無情にも没収されてしまう。そこで駅に入る手前で、あのカラスウリを引いて列車を急停止させ、列車からいっせいに飛び降りて逃げるなんてことがよくあったそうだ。

貨物列車は
もうこない

とかなんとか、いろいろ考えていると、この駅の風情には似つかわしくないスマートなキハ110三両編成がホームに入ってきた。ずっとワフのなかで待っていたおじさんが一人だけ乗ると、キリッとした女性車掌さんがドアを開め、出発進行。ディーゼルエンジンのゴゴゴゴというエンジン音と排気煙を残して去っていく。

飯山線は貨物扱いをやめて久しい。旅客営業だけ

である。一時は廃止も検討されたが、平行する国道
117号が冬期凍結、積雪で不通になることが多く、
地元の要望でかろうじて廃線をまぬがれたという。
ここ信濃平駅は、JR東日本の駅情報検索による
と、

開業年月日 大正12年7月6日

駅住所 長野県飯山市大字常磐

所属支社 長野支社

みどりの窓口 ごさいません

びゅうプラザ ごさいません

指定券販売機 ごさいません

キオスク なし

コンビニ なし

飲食店 なし

駅ビル なし

ということで、待合室代わりの貨車のほかなにも
ない。

かつてはこの駅も人の乗り降り、荷物の積み卸し
で栄えたはず。もうひとつのホーム跡と草ぼうぼう
の側線跡が、ここで上り列車、下り列車の交換（単

線での列車のすれちがい、貨物の積み卸しがおこ
なわれていたことを示している。いまでは側線はレ
ールを外され、本線一本だけになっているので、も
う列車交換はできない。

駅前広場には、古びた倉庫のほかに公衆便所と桜
の老木が一本あるきりだ。この桜、農民兵たちの
出征、そして復員、集団就職の子供たちの家族との
別れ、あるいは秋の収穫、信州名産リンゴや新米の
積み出しなど、この駅でくりひろげられたさまざま
な光景をずっと見てきたのだろう。

駅の横手には民家が数軒と床屋さんが一軒あるだ
けだ。ディーゼルカーが去ったあとに残るのは静寂
ばかり。床屋さんの庭先に建てられた鯉のぼりの風
車がカラカラと、初夏の風に鳴っている。つばめが
一羽、すいっと田んぼの水面をかすめていく。





FORUM

浄土の広場

「浄土の広場」では

読者の自由な参加をお待ちしています。

詩、エッセイ、短歌、俳句、川柳、書評、映画評、

TVウオッチング、紀行文、その他創作等。

あるいは会員各寺院での催しの告知、報告など。
どしどし編集部にお寄せ下さい。

浄土誌上句会

●光

〔特選〕 駅弁の小さき梅干し湖光る

目黒 裕

駅弁を買って乗る。しばらくすると窓の景色が変わってきて、いよいよ旅に出たという思いが強くなる。外の景に氣をとられながら弁当を開く。小さい梅干しと光る湖とで、旅を楽しんでいる様子が見えてくる。

〔佳作〕 四天王の憤怒あらわに若葉光

河合富美枝

雲間より射しくる光矢車草

天野富佐子

それぞれの谷に寺あり薄暑光

増田 信子

●駅

〔特選〕 駅ビルの屋上に来てみみず買う

植田 天規

駅ビルと呼んでいるが、上部は百貨店というような建物だろう。屋上に熱帯魚を飼った魚の餌を売っている。明日は釣りに出かけ

るというので、みみずを買いに来たのだ。あ
るいは飼っている魚の餌かも知れない。

〈佳作〉単線の駅より愛する谷若葉

梅雨寒し0番線の駅蕎麦屋

東京駅の表玄関燕の巣

佐藤 雅子

斉田 仁

石原 新

●自由題

〈特選〉蜘蛛幼な手のひらほどの網を張り 中島富士子

一読女郎蜘蛛を思い浮かべたのは、以前は
窓先などで普通に見かけたからだろう。それ
は生まれてどれくらいになるのだろう。それ
なりの大きさの巣を張っている。手のひらほ
どというのがいかにもかわいい。

〈佳作〉無人駅キャベツ畑の中にあり

すり寄りし犬の肋や五月晴れ

生ビール観劇の夜のはや更けぬ

鈴木真理子

山口 信子

村上 青女

浄土誌上句会のお知らせ

兼題
季語ではありません

池待つ自由題

誌上句会 〈編集部選〉

■光

子規の家俳句絵画に風光る
棚田いま光を浴びて麦の秋
逆光の赤城切絵のごと涼し
夕焼を背にキャッチボール子ら光る
島の灯へ船足遅し夜光虫
雷や点滴の針光りけり

■駅

鴨台に学びし友よ佐原駅
駅前のからくり時計風緑

締切・二〇〇九年九月二十日

発表・『浄土』二〇〇九年十一月号

選者・増田河郎子（『南風』主宰）

応募方法

- いずれの題とも数の制限はありません。
- 特選各1名・佳作各3名
- 葉書に俳句（何句でも可）と、住所・氏名を必ずお書き下さい。

宛先

〒105-0011 東京都港区芝公園4-7-4 明照会館内
月刊『浄土』誌上句会係

山里の駅に燕の子が三羽
夏月や終着駅の楽止まる
風薫る幸福名の無人駅
駅弁の蓋に飯粒南風
駅を出て薄暑の街へ押し出さる
人去りて静かな駅の花あやめ

■自由題

巡礼の和讃染み入る若楓
緑陰に朽ちし阿弥陀の慈悲を浴ぶ
草笛に答へてをりぬ山鴉
海に浮く利尻富士見て白魚漁
くちなはの町を横切る正午かな
繋がれしボートがボート繋ぎをり
青梅雨の砂糖蔵のごとくあり
五百羅漢涙顔あり走り梅雨
ぎこちなき下駄の歩みや浴衣の子
半島の灯の一つづつ点きて夏
蔓薔薇の門をからめて咲き誇る

河合富美枝
中島富士子
工藤浄真
目黒 裕
浜口佳春
山口信子
佐藤雅子
金谷友江
河合富美枝
工藤浄真
小林苑を
工藤 掉
内藤準人
谷しげ子
中村真一
池田伊吹
石原 新

さっちゃんね



63 かい目

かまちろふろう

かまちろふろう先生作新聞四コマ漫画「ゴンちゃん」が各地方新聞に掲載されています。(静岡新聞・山梨日々新聞・北日本新聞・福島民報・宮崎日々新聞・新日本海新聞・山形新聞・長崎新聞・岐阜新聞・以上朝刊。中国新聞・神戸新聞、以上夕刊)



名月を雲の向うに想い見る

岱潤

先月いよいよ裁判員制度が実質的にスタートした。東京そして埼玉で二件の裁判が、突然選ばれた民間裁判員六名とともに、わずか四日で量刑が言い渡された。

二件とも被告が罪を認めている、比較的判断のしやすいものであったようだが、今回の裁判員に選ばれた人々の顔ぶれを見ていると、偶然とは思えないほど、良識的な人々ばかりであった。当日招集がかかりながら、外れた人の服装が、Tシャツ・ジーパンであったのを見たとき、こういう服装なら選ばれずに済むのかと思ってしまうのは、私ひとりでは

ないだろう。

小泉内閣の小さな政府構想の中で出てきた拡充司法構想としての裁判員制度、素人が量刑まで決めてしまう日本の制度に、どうしても違和感を覚えてしまう。今回の最初の裁判でも、殺人を犯した人の罪を、二十一年にするのか、十五年にするのかは、長い裁判の歴史の中で培われた感覚のはずだ。素人が入る余地などあるのだろうか。密室でのプロの裁判官との協議に主だっていることは、想像に難くない。

これから裁判では、検事も弁護人も素人を相手に、法に則ってではなく、感情を刺激して審議を進めてくるだろう。時

代の趨勢や人々の人権感覚などが影響し、えん罪が増える可能性はどんどん高まっていると言えそう。

いい時代とは言えそうにない。(長)

編集チーフ
編集スタッフ

長谷川岱潤

斎藤晃道

佐山哲郎

青木照憲

村田洋一

浄土

七十五巻九月号 頒価六百元
年金費六千円

昭和十年五月二十日第三種郵便物認可

印刷 平成二十一年八月二十日
発行 平成二十一年九月一日

発行人 佐藤良純

編集人 大室了皓

印刷所 株式会社 シーティーイー

〒一〇五〇〇一一

東京都港区芝公園四・七 四明照会館内

発行所 法然上人鑽仰会

電話 〇三(三三)五七八・六九四七

FAX 〇三(三三)五七八・六九四七

振替 〇〇一八〇・八・八二八七

雑誌『浄土』
特別、維持、賛助会員の方々

飯田実雄(駒ヶ根・安楽寺)
巖谷勝正(目黒・祐天寺)
魚尾孝久(三島・願成寺)
大江田博導(仙台・西方寺)
北山大超(焼津・光心寺)
加藤亮哉(五反田・専修寺)
熊谷靖彦(佐賀・本應寺)
桑原恒久(川越・蓮馨寺)
佐藤孝雄(鎌倉・高德院)
佐藤成順(品川・願行寺)
佐藤良純(小石川・光圓寺)
東海林良雲(塩釜・雲上寺)
須藤隆仙(函館・称名寺)
高口恭行(大阪・一心寺)
田中光成(町田・養運寺)
中島真成(青山・梅窓院)
中村康雅(清水・実相寺)
中村瑞貴(仙台・愚鈍院)
野上智徳(静岡・宝台院)
藤田得三(鴻巣・勝願寺)
堀田卓爾(静岡・華陽院)
本多義敬(両国・回向院)
真野龍海(芝・天光院)
拙 博之(網代・教安寺)
水科善隆(長野・寛慶寺)
宮林昭彦(大本山光明寺)
山田和雄(諏訪・貞松院)
(敬称略・五十音順)

ホームページ <http://gekkan-jodo.info>

とう き そう ねん
當起想念

當に想念を起すべし
 觀無量壽經

生野善應

亜細亜大学講師
 東京高輪・光福寺住職

人の優れた資質、技量は、自己の目標と僅差のとき、最も高い価値をもつ。

「追善」とは、ほんらい、故人の善い行いを追慕して、それを自分の生活に生かしていくことに他なりません。この語句は、施主が故人の回向を依頼したとき、僧侶が法要の中で戒名とともに唱える仏教語です。

さてこの世には完璧な人はいませんから、「追善」は、故人となった近親者が生前持ち合わせていた、優れた資質・技量を取り上げて、それを自

分の生活の中にかばかりであれ活かそうという気持ちで込められています。

目標とする人の人格・識見・能力がずば抜けて優れていると、諦めが先に立ち、目標となりません。マラソンでも生活でも追う者に力を引き出す原動力となるのは、僅差です。実行可能な目標こそ価値があるのです。

法然上人鑽仰会の



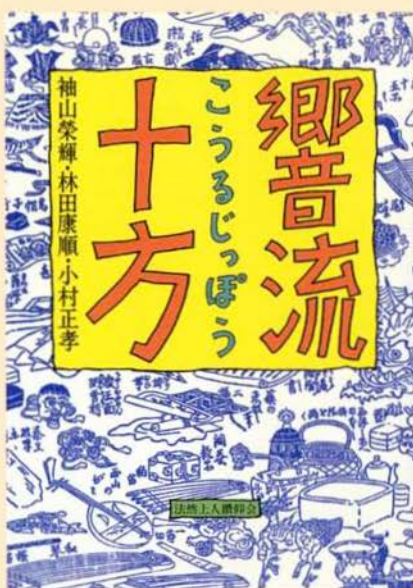
当会発行の書籍、雑誌
のお求めは、当会へ直接
お申し込みください。

なお、月刊『浄土』を除き送料は
含まれておりません。別途実費を
申し受けます。

法然上人鑽仰会

電話／03-3578-6947

FAX／03-3578-7036



響流十方ころるじっぽう
600円(税別)

「差出人は法然さん」
600円



月刊『浄土』
バックナンバー



「念佛讀本」完全復刻版
1,600円



中綴装寸法 47×59cm



選擇集十六章之図(額入り)
「選擇集絵解き物語」含む
20,000円(別途梱抱料300円)



「法然上人絵伝絵葉書」
(8枚セット)800円



中綴装寸法 47×59cm
「法然上人絵伝・残欠二巻本」より